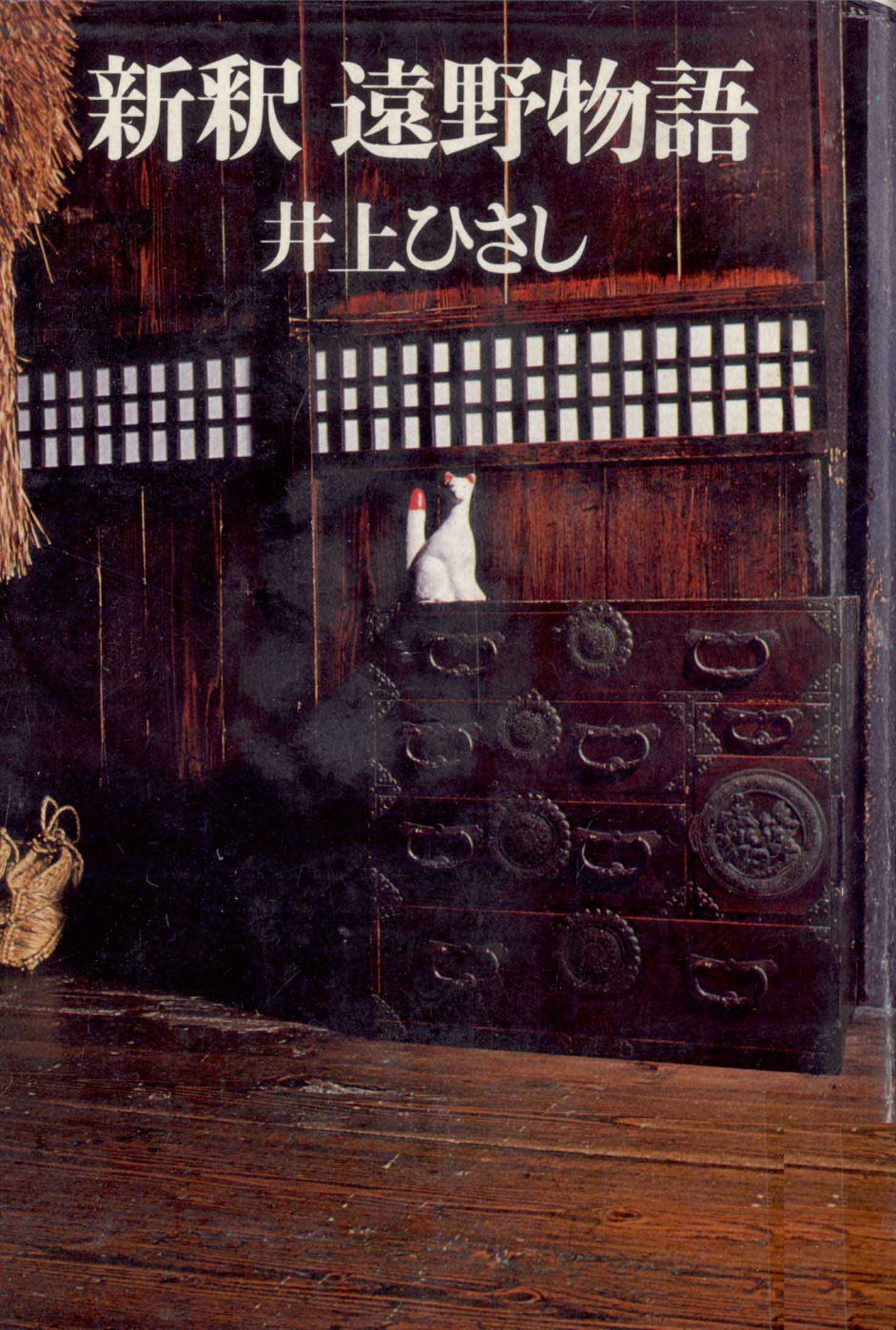


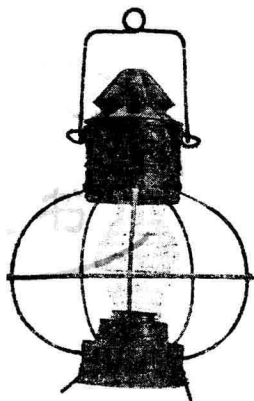
新釈 遠野物語

井上ひさし



新釈 遠野物語

井上ひさし



筑摩書房

新釈 遠野物語

著者 井上ひさし

発行者 井上達三

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二―八

印刷 三松堂印刷

製本 積信堂

一九七六年十一月五日 初版第一刷発行

〇〇九三―八〇一四七―四六〇四

目次

鍋の中	5
川上の家	33
雉子娘	59
冷し馬	85
狐つきおよね	111
笛吹峠の話売り	137
水面の影	157
鰻と赤飯	177
狐穴	199

カバー・表紙・扉
資料提供 上野手紙・碧祥寺
撮影 多賀庸恵

新
積
遠
野
物
語

鍋
の
中

柳田国男は『遠野物語』を次のように始めている。

「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。鏡石君は話上手には非ざれども誠実なる人なり。自分も亦一字一句をも加減せず感じたままを書きたり。思ふに遠野郷には此類の物語猶数百件あるならん。我々はより多くを聞かんことを切望す。国内の山村にして遠野より更に物深き所には又無数の山神山人の伝説あるべし。願はくは之を語りて平地人を戦慄せしめよ……」

柳田国男にならってばくもこの『新釈遠野物語』を以下の如き書き出して始めようと思う。

「これから何回かにわたって語られるおはなしはすべて、遠野近くの人、犬伏いぬがせ太吉老人から聞いたものである。昭和二十八年十月頃から、折々、犬伏老人の岩屋を訪ねて筆記したものである。犬伏老人は話し上手だが、ずいぶんいんち、臭いところがあり、ばくもまた多少の誇大癖があるので、一字一句あてにならぬことばかりあると思われる。考えるに遠野の近くには、この手の物語がなお数百件あることだろう。ばくとしてはあんまりそれらを聞きたくはないのであるが、山神山人のこの手のはなしは、平地人の腹の皮をすこしはよじらせる働きをするだろう」

た肉刺の水腫にふうふう息を吹きかけながら休んでいると、谷川をはさんだ向いの山から不意に突き刺すように、ラッパの音が聞えてきた。ラッパといってもそれはただのラッパではなくトランペットで、谷川の水よりも澄み切った音が、りようりよう唳々とあたりの山をかけめぐった。素人の耳にも、これはずいぶん年季が入っているなとわかる音色だった。

いったいこんな山の中で誰がトランペットを吹いているのだろうか。眼を細めて向いの山を眺めると、山腹の中ほどに黒々とした穴が見え、その穴の横に人影がひとつあった。ときおり、その人影がびかりびかりと眩しく光る。トランペットが太陽の光をこちらへはね返してくるのだろうか。

聞き惚れているうちに昼休みが終り、トランペットの音もやんだ。人影は穴の中に消えたが、彼我のへだたりは直線距離にして百米はたつぷりあったから、人相や服装は一切判然としない。(東北の山の中の、そのまた山の中に、とんだ酔人がいたものだ)

と思ひながら、その日は仕事を続けた。

しかし、トランペットが鳴り響いたのはその日だけのことではなかった。あくる日も、またそのあくる日も、昼どきになると決まったようにトランペットが鳴った。どうやらそれは毎日の習慣らしい。曲目はわからない。とにかくどれもクラシックの曲のようだった。

二週間もするうちに、その吹き手の習慣は多くの習慣にもなった。トランペットが鳴ると、ぼくは手斧を振うのをやめ、弁当を開き、トランペットがやむと立ち上って手斧に手をのばした。

秋が深まって行つた。ぼくは仕事にも慣れ、少々調子の悪い日でも、十五、六把は確実に薪を作った。

十一月に入ると小雨の日が続き、山は雨で煙った。そういう日は、上司である庶務主任が「今日は休んでもいいよ。骨休めに事務室でぶらぶらしていなさい」と言ってくれた。けれどもぼくは、ゴムの合羽を借りて山へ出かけた。主任はぼくの後姿を見送りながら、「あいつはなかなかよくやる」と感心していたようだが、べつにぼくは仕事熱心だったわけではない。昼休みのトランペットに惹かれていただけのはなしである。

その日も朝から、霧のような雨が降っていた。そして昼近く、小粒の雨にかわった。午後は仕事はやめよう、トランペットを聞いたたら、山を降りよう、そう考えて雨を含んですっかり重味を増した枯枝を集めていたが、どうしたことか、その日に限ってトランペットは鳴らなかった。ぼくは妙に心配になった。吹き手の身の上に、なにかよくない異変が起ったのではあるまいか。

降り続く小雨ですこし水嵩を増した谷川を渡り、落葉をじゅくじゅくと踏んでぼくは向山の穴に近づいた。穴からは薄紫色の煙がゆっくりと流れ出ている。

「……ごめんください」

おずおず声をかけると、

「だれだね」

内部から低い唸れ声しやがが返ってきた。

「向いの山で薪作りをしている療養所の者です。どうして、今日はトランペットが鳴らないんで

すか」

穴の中からは返事がなかった。

「具合でも悪いのですか？」

重ねて訊くと、

「ああ、冬が来る前はいつも神経痛が出る」

大儀そうな声と共に、老人がひとり穴の中から顔を出した。そして片方の手を穴の入口の丸太の柱に当て、腰をかがめながら、下からぼくの顔を眺めあげた。

こんな山の中の穴に住みついていて人間のことだから、さぞやむさくるしい風体をしていることだろう、と思っていたのに、老人は意外なほど、さっぱりした様子をしていた。腰までの綿入れの上に長い顔をのせている。顎には丁寧に刈り込まれた胡麻塩ごましおひげを貯えている。口はすこし前に突き出しており、唇は厚かった。唇の厚いのはトランペットを吹くせいだろう。鼻は丸くて大きい。おまけに霜焼にかかったように赤い。細い眼がやさしく光っていた。ひとことでもいいば、どこことなく狐を思わせる。蓬髪は黒羅紗ろしやのスキー帽で押えてあった。

「毎日、トランペットを楽しみにして聞いていたものですから、聞えないとなると、急に気になって……、それでなにかあったのかなと思ってちょっと覗いてみたんです」

老人の眼の光がさらにやさしくなった。

「気にかけてもらってありがたい」

「何でもない人ならいいです。さようなら」

帰りかけたぼくの背中に老人の声が追いかけてきた。

「お茶でも飲んで行かないかね？」

見上げると雨はみぞれに変わっていた。こんなときに暖かい茶とはありがたい。ぼくは老人の後について穴の中に入っていった。

これが犬伏老人と口をきいたはじまりだった。

穴の中も老人の風体と同じように綺麗に片付いていた。穴の広さは相当なもので十畳間ほどもある。周囲には薪が天井まで積んであって、岩壁は見えない。下は板床である。出口を入ってすぐのところに仕切つてある囲炉裏では粗朶そだがばちばちと音をたてている。天井からはランプがぶら下っていた。奥に布団が敷いてあって、その枕許にトランペットが放り出してあった。

「トランペットがお上手なんですね」

縁ふちが残らず欠けて鋸のこぎりの目のようになった茶碗からお茶を啜りながらぼくは言った。

「詳しくはわかりませんが、素人離れしていると思います」

老人はけらけらと笑った。

「素人離れしているはよかった。これでも昔は玄人、プロのトランペット吹きだったんだがね。東京の或る交響楽団の首席トランペット奏者だったのさ」

ぼくは驚いて老人をみつめた。老人はこっちの反応を窺うようにして、にやにやしている。そう言われてみると、老人のたたずまいはなんとなく品がよく、動作も洗練されているように思わ

れる。言葉にも訛なまりはなく一応はちゃんとした標準語である。しかし、中央の交響楽団の首席トランペット奏者が、なぜこんな山の中に住みついているのだろうか。

老人はぼくの心のなかを読んだようで、もう一杯茶はどうだね、とこっちに薬罐を渡して寄越した。

「そのわたしが何故こんな山の中に住みつくようになったか、聞きたいかね」

ぼくは頷いた。どうせ外はみぞれ降り、午後からは休みだ。時間はたっぷりあった。

「あれはもうだいぶ前のこと、たしか大正の、関東大震災の起る二、三年前、わたしたちのオーケストラが東北地方へ演奏旅行に出かけたことがある……」

老人は、茶で唇をしめしながら、遠くを眺める目付きになった。ぼくは囲炉裏に手をかざしながら、老人のつぎの言葉を待った。

「……オーケストラなぞ東京でも珍しかった時代だから、この演奏旅行は行く先々で大受けだった。そして最後の演奏会場が、この先の大橋という山の中にある鉾山の講堂だったのだが、演奏を終って、宿舎の職員寮に戻り、さあ、明日は山を降り、馬車で遠野へ出て、遠野からバスで花巻まで行けば、汽車に乗れる、汽車に乗れば東京は目の前だと、三十名近い団員が鉾山側で用意した酒で大はしゃぎにはしゃいでいると、そこへ鉾山の職員が電報を手を顔を出した。電報はわたし宛で、開いて見る前からいやな胸騒ぎがした。そして、その胸騒ぎはあたっていった。電報にはこう書いてあったのだよ。

『ツマキトク、スグカエレ』

言うのを忘れていたが、わたしはそのひと月ばかり前に、下宿の娘と結婚したばかりでね、一週間も一緒に居ないうちに、演奏旅行に出かけてしまったというわけで、十年二十年と連れ添った女なら、そう慌てはしなかったのだろうが、そのときはひどく妻が可哀相に思われ、わたしは鉾山の職員に言った。

『これからすぐ山を下ります。里へ下りたら馬車で遠野まで飛ばすつもりですから、鉾山出入りの馬車屋へ紹介状を書いていただけませんか』

鉾山の職員はわたしを引きとめた。

『夜、山を下りるのは危険です。このあたりにはまだ、狼がいますし、夜になると奴等は平気で道をうろつきますから。それに、この山奥には山人さんじんというのがいて、この山人に取っ囲まると生きては帰れないそうです。幸い、私はまだ一度も、その山人というのに出逢ったことはありませんが……』

団員の連中も、口を揃えて一日待て、とわたしを引きとめた。

『たしかに心配で居ても立ってもいられないだろう、その気持はわかるが、ひとりじゃ危い。どうせ、明日はみんな一緒に山を下りるんだ。東京へ着くのは一日、遅くなるにしても、それでもその方が安全だよ』

わたしは連中の言うことなど聞く気はなかった。その一日の差で、妻の死に目に逢えなくなったらどうするのだ。それに、妻だってわたしの顔を見ればすこしは元氣づくにちがいない。ひょっとしたら、わたしの顔を見て持ち直すかもしれない。そのためには一日でも早く帰らなくては

ならない。

わたしは、トランペットケースを左手でしっかりと抱き、右手に鉾山の職員が貸してくれた提灯^{ちようとう}をかかげて、里へ向って三里の山道を歩き出した。たしか夜の九時頃だった。

月のない夜で真ッ暗闇。提灯の灯りだけが頼りだったが、これがどうしたというのか、半里ほど降りたところでふっと消えてしまった。あいにくわたしは煙草を喫わないから、マッチの持ち合せはない。一時は闇の中で途方に暮れていたが、ぐずぐずはしていられない。足をそろそろと前に出し、地面を確かめるようにしながら、またしばらく歩いた。

と、急に、あたりがなんとはなしに明るくなりだした。雪が降って来たのだ。あんたも知っているように、雪というやつはむろん光りはしないが、それでいてあたりを明るくする性質がある。ほら、雪明りというやつさ。おかげで足許が定まった。わたしは遅れを取り戻そうと思い、ぐんぐんと歩いて行った。しばらく行くうちにすこし風が出てきた。雪は吹雪^{ふぶき}きだした。上から下から右から左から、桜の花びらほどもある大きな雪が降ってくる。音もなく雪が降るなんてよく言うが、あれは間違いだね。あの時の雪はサッ、サッ、カサ、カサとはっきりと音をたてて降っていたよ。

わたしはその物凄さに呆れて、一分か二分、棒立ちになったまま、何億何兆という雪片の舞い降りてくるのを眺めていた。すると錯覚というやつは妙なもので、雪がびたりと宙に停まって見え、逆に自分が宙へ舞い上るような気がしはじめた。

わたしは怖くなって、なるべく上を見ないようにしながら、ただもう矢鱈^{やたら}に道を急いだ。